

きらきら6号機蒲生発電所

75名295万円の寄付金集まる

NPOきらきら発電は8月の理事会で、宮城野区蒲生地区にある舟要洞場(笹谷由夫氏所有)の屋根に、パワコン9、9kwパネル12kwの太陽光発電装置を設置することを決めました。蒲生6号機の建設です。蒲生6号機の建設費用は330万円。この費用を全額寄付金で賄う方針を立て、8月12日より寄付金の訴えを始めました。

どれほど集まるか自信がないなか、200万円を最低の目標に掲げました。呼びかけ1か月で、200万円の寄付が寄せられ、その後も順調で10月14日時点で、75名の方から295万円の寄付金が集まっています。協力者の皆様に感謝します。

きらきら発電の理事会は、10月6号機建設を全額寄付金でまかなうことを再確認。10月14日時点で、あと35万円。建設工事は11月中旬の予定で、それまでなんとか330万円の目標が達成できるよう、協力を呼びかけられています。

蒲生地区にはすでに石炭火力が稼働し、今後バイオマス発電所が2基建設される予定です。脱原発・脱石炭をめざし、自然エネルギーによる発電所建設に、ぜひ、お力を貸してください。口座名義が「特定非営利活動法人きらきら発電、ゆうちょ銀行(記号18190、番号02675271)。他行からは「店番818、普通預金、0267527」です。

女川原発事故時の避難計画ずさんなまま

宮城県議会が再稼働賛成請願を採択！

10月13日宮城県議会の環境福祉委員会が女川原発再稼働賛成請願を採択。22日の本会議でも採択される予定です。事故時の避難計画で、宮城県が国から求められているガイドラインを作成しないまま、また31受け入れ自治体中、29自治体が受け入れマニュアルも作っていない段階での強硬採択です。実効性のある避難計画を求め、声を上げ続けましょう！



小風力発電所、検討開始へ

NPOきらきら発電の10月理事会で、小風力発電設置について議論し、来年度の建設具体化をめざし、検討にはいる事を確認しました。

今回の6号機建設の検討作業の中で、蒲生に風力発電も欲しいとの声が出され、仙台市内にある自然風力発電(株)に相談したところ、3kwhの小風力発電であれば、400万円程度の資金で建設できると知らされました。しかしFIT(固定価格買取制度)ではすでに18円/kwhの単価になっており、採算はきびしいとのこと。

それでも100万円程度の赤字を覚悟し、具体化できるかどうか検討し、来年10月までに結論を出すことにしました。



写真は秋田県由利本荘市にある小風力発電所(2016年撮影)

蒲生6号機開所式11月28日に

蒲生6号機は11月中旬工事予定です。建設完了後の開所式は11月28日午前10時より、現地にて行います。参加希望者は070-2010-3777にご一報ください。

きらきら発電市民共同発電所ニュース

2020年11月号 第69号

〒981-3215 仙台市泉区北中山3丁目17-12

電話・FAX 022(379)3777

HP kirakirahatuden.com/

Eメール hirohata3777@outlook.jp

元住民建設 息子2人の慰霊施設活用

交流復活へ 太陽光発電

仙台・蒲生

東日本
大震災

10年

太陽光パネルは48枚を設置し、計10kw程度の出力を予定する。発電設備は11月に完成する見通し。余剰電力は東北電力に売却する。来年3月まで寄付を呼び掛け、総工費330万円を工面する。総工費を上回る寄付が集まった場合は、小型風力発電設備を併設する。

母要洞場は蒲生地区の元住民で、多賀城市の無職笹谷申夫さん(74)が2013年に建設した。津波の犠牲になった長男舟一さん(当時20)、次男要司さん(当時19)の名前から「文字ずつ取った愛鳥を飼育するための場所だ」。

県が七北田川河口から蒲生川にかけて進める防潮堤の建設で、自宅跡が予定地となり、19年秋に約50

人が集まった場合は、小型風力発電設備を併設する。母要洞場は蒲生地区の元住民で、多賀城市の無職笹谷申夫さん(74)が2013年に建設した。津波の犠牲になった長男舟一さん(当時20)、次男要司さん(当時19)の名前から「文字ずつ取った愛鳥を飼育するための場所だ」。

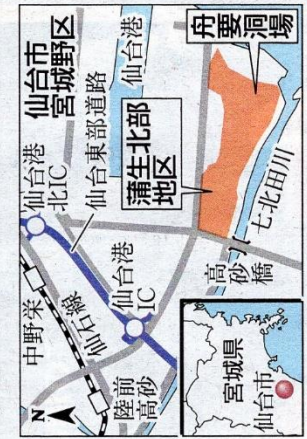
県が七北田川河口から蒲生川にかけて進める防潮堤の建設で、自宅跡が予定地となり、19年秋に約50



太陽光発電が始まる慰霊建物「母要洞場」(左奥)と笹谷さん

被災地での太陽光発電に取り組むことを決めた。市民の皆さんにぜひ協力してもらいたい」と呼び掛ける。

寄付金は直接、NPO法人の口座に振り込む。連絡先は広幡さん070(2010)3777。



仙台市のNPO法人「きらきら発電・市民共同発電所」が東日本大震災の犠牲者を慰霊する建物で、太陽光発電を始める計画を進めている。津波で息子2人を亡くした男性が、宮城野区蒲生の自宅跡近くに建てた「母要洞場」の屋根に太陽光パネルを設置し、賃料の代わりに建物に電気を供給する。男性はこれを機会に母要洞場を元住民たちの交流施設にするという。

0以北側に移設した。笹谷さんは毎日通い、2人の冥福を祈っているという。

建物は、代表を務める元住民のグループ「蒲生のまちづくりを考える会」の会合にも使う。太陽光発電で電気代の自己負担がなくなるため、今後は元住民が気軽に集まれる施設として、幅広く利用してもらおう。

笹谷さんは「大部分が災害危険区域となった蒲生地区は、区画整理が進んで昔の面影がなくなり、元住民は立ち寄りづらくなっている。母要洞場から交流を取り戻したい」と期待する。

NPO法人の広幡文事務局長は「心の復興を目指す人に寄り添いたい」と思い、